グラマトフィルム　キナバルエンセ（*Grammatophyllum kinabaluense* Ame&Schweinsf.）の開花について

上野明楽・磯部実

はじめに

当園は開園当初よりラン科植物の収集に力を入れており、年間を通じてランを栽培している。そのなかには世界最大級のランとされるグラマトフィルム属スペシオスム種（*Grammatophyllum speciosum*）も含まれている。グラマトフィルム属は本園では数種類保有しているが、毎年開花するものから、数年に一度の開花サイクルのものまで様々であり、狙って開花させることが難しい。この度開花したキナバルエンセ種（*Grammatophyllum kinabaluense* Ame&Schweinsf.）はボルネオ島にあるキナバル山固有種であり、世界最大のランとして知られているスペキオスム種に比べて、栽培されることが少なく、国内での開花例が限られているため、開花に必要な要因がわかっていない。

このたび本園で4年ぶり2回目の開花が見られたため報告する。

栽培と管理

本株は大温室の北口付近にあり、木枠を組んだ鉢に植栽し、植え込み材にはヘゴのかけらを使用している。潅水は根の成長と鉢の大きさを考慮し、乾かし気味の状態を保つことによって、空気中に出てくる上向きの根を伸ばすよう間隔を空けて行った。また、新芽や根の動く春先から秋までは、潅水の際に市販の化成肥料を6,000～10,000倍の濃度で希釈し、毎回与えた。

前年度まで夏場に60％ほど遮光ネットをかけて栽培していたが、夏場の遮光が原因で開花に至らないのではないかと考え、2024年度から夏場でも無遮光で管理し、送風器を配置し葉に微風を当てる等葉焼けに注意しながら栽培した。このため、猛暑であったにもかかわらず葉焼けすることもなく健全な生育が確認できた。

開花

4月15日に蕾を確認し（写真1）、そこからナメクジの食害を防ぐためにナメクジ除けを用意した。総状花序を形成し、花序の株に近い方の花から順に開花し、一番花は唇弁と花弁がくっついた状態で5月20日に開花した（写真2）。最終的には正常花が45輪着花し、花弁のくっついた状態で咲いた奇形が3輪咲き、総数は一花茎48輪となった。花茎は約230 cmまで伸び、一輪の自然開張幅（直径）は約70 mmであった。（写真3、4）

考察

これまで行っていた夏場の遮光をやめ、日照時間、日照量ともに向上させることで、安定した開花が見込めるのではないかと考えた。

安定して開花させることができれば、流通することが稀な本種の種子を得て増殖することができる開花のメカニズムをこれからも考察する必要がある。

4年ぶりの開花となったが、開花の要因は不明のままである。引き続き開花するためのメカニズムを調べるとともに、貴重な種類なので株を健全な状態で栽培、保存できるよう努める。

本種をはじめとした大型のグラマトフィルム属は場所や設備がいるだけでなく、ウイルスに罹患しやすいため日頃からハサミの消毒や、他のランを近くに置かない、地面に葉をつけない等の意識の徹底が健全な栽培を続けるために必要である。

展望

このような大型のラン科植物は趣味で栽培することが困難であり、当園のような大型の温室がある施設に栽培が限られる。過去に一度きりしか導入されず、国内では絶えてしまう種も多くあるため、本園ではこうしたラン科植物を保有、保全していくためにも全国の植物園と協力し、情報共有を進めていく必要があると感じた。

写真１　４月 15 日蕾確認

写真３　花のアップ

写真２　５月 20 日一番花開花

写真４　全体写真